

# 榎本武揚と箱館戦争

2024.2.10 佐々木眞佐子

## 1. はじめに

箱館戦争とは、「戊辰戦争の戦闘の一つで、新政府軍と旧幕府軍との最後の戦闘である」と Wikipedia には書かれている。この例のように、一般に箱館戦争は戊辰戦争という日本の統一をめぐる一大戦争の最終戦であったという位置づけがなされている。しかし箱館戦争の首領である榎本武揚は、戊辰戦争が始まる前の尊王攘夷や討幕運動に係わるどの争いの場面にも、その姿を見せていない。さらには戊辰の年の上野戦争、奥羽越列藩同盟の戦闘にも榎本が戦った記録は見られない。榎本は戊辰戦争の末期に突然表舞台に現れ、土方歳三率いる新選組や大鳥圭介の伝習隊、遊撃隊、彰義隊、衝鋒隊、額兵隊など数多くの部隊を配下に引き入れ、その兵士ら三千余名を乗せた八艘の艦隊を率いて蝦夷地・箱館へと渡っていった。榎本とはいったいどのような人物だったのか。そしてなぜ箱館戦争を起こすことになったのか。榎本の行動を軸に、箱館戦争への行程と結末について考えてみたい。

## 2. 榎本武揚の経歴～開陽丸艦長になるまで

### <天文学者の父の影響>

榎本武揚は1836年（天保7年）8月25日、榎本円兵衛武範の次男として生まれる。幼名・釜次郎。父の円兵衛は備後国の庄屋の息子であったが、14歳で伊能忠敬の内弟子となって測量の旅に随行し、伊能の死後も地図（大日本沿海輿地全図）の完成まで従事した。その後武士の身分を得て幕府天文方に仕出し、高橋景保とともに暦法の研究に従事した人物で、技術者・科学者としての資質に優れ、その知識の広さと誠実な人柄によりのちに将軍・家慶の側仕えに取り立てられた。

武揚は父の影響もあり、学問への探求心は強かった。昌平坂学問所に入学して儒学を学んでいたが、17歳頃になると蘭学への関心が高まり、自ら江川太郎左衛門の英龍塾の門を叩いた。そこでは蘭語や蘭学の兵書、大砲術、製鉄技術などを学ぶことができ、また中浜万次郎による国際事情や英語の講義も受けることができたという。この塾には後に箱館戦争と一緒に戦う大鳥圭介も通っていた。榎本はここで熱心に勉強し、蘭語や英語に習熟していく。そして1853年、榎本が昌平坂学問所を卒業したこの年に、ペリー艦隊が浦賀に現れ、開国を要求して日本に大きな衝撃を与えることとなった。

### <箱館奉行の小姓として蝦夷地巡察に随行>

1854年2月、榎本にとっての一大転機が訪れる。箱館奉行堀利熙の従者として蝦夷地巡察に随行する役目を与えられたのである。この巡察の背景には前年のペリー来航が関係していた。アメリカが日本に急接近していることを知ったロシア政府は、日本との国交を開くため、急ぎにプチャーチンの特使とする交渉団を日本へ送り出した。7月、長崎に入港したロシア艦隊は、幕府に対し通商条約を前提に国境画定の交渉を翌年6月に樺太の大泊（コルサコフ）で開始することを一方的に通告。慌てた幕府は海防掛目付・堀利熙をロシアとの交渉役に任じて、蝦夷地の調査に当たらせた。1854年2月、堀は勘定吟味役・村垣範正とともに蝦夷地調査に出発、この一行に小姓として随行したのが19歳の榎本であった。

一行は北海道西北部を巡察しながら5月下旬に宗谷に到着したが、そこでロシアから一方的に交渉の中止を告げられる。理由は、ロシアがオスマントルコとの戦争（クリミア戦争）に突入したことによるも

のであった。しかし一行は探索のためそのまま蝦夷地（樺太）へ渡り、北緯 51 度のホロコタンまで視察<sup>1</sup>した。この巡察で、榎本は蝦夷の地形や気候、天然資源などについて豊富な知識を身に付けた。

そして 8 月下旬箱館に戻った榎本は、軍艦の脅威を目の当たりにすることとなる。クリミア戦争でロシアの敵となった英仏連合艦隊は、8 月 29 日、カムチャッカ半島まで遠征してロシアへ砲撃を加えたのである。その時期箱館に滞在していた榎本らは、間近で起きているこの事態に震撼させられたことだろう。そして 9 月に入り、プチャーチンの乗る軍艦が改めて箱館に入港し、交渉の再開を通達した。砲艦外交を迫るロシア艦隊を目の前に、若い榎本が非常に強い危機感を抱いたことは想像に難くない。この蝦夷地での体験がその後の榎本の進路を決定づけ、さらに箱館戦争に至る伏線を作ったと言えるであろう。

#### <長崎海軍伝習所からオランダ留学へ>

榎本は日本の海防の緊急性と重要性を肌身で感じ、江戸に戻ってからすぐに長崎海軍伝習所入所を志願した。ここでの榎本の熱意と勤勉ぶりはオランダ人士官カッテンディーケの手記『長崎海軍伝習所の日々』の中にも見ることができる。

「榎本釜次郎氏のごとき、その先祖は江戸において重い役割を演じていたような家柄の人が、二年来一介の火夫、鍛冶工および機関部員として働いているというがごときは、まさに当人の優れた品性と、絶大なる熱心を物語る証左である。これは何よりも、この純真にして快活なる青年を一見すれば、すぐ判る。彼が企画的な人物であることは、彼が北緯五十九度の地点まで、北の旅行をした時に実証した」<sup>2</sup>

榎本はここでカッテンディーケらオランダ士官に艦の操縦や航海術などを学んだ。オランダ語を使うことにも慣れ、約 2 年間の操練の後に最優秀の生徒の一人として卒業し、1858 年には江戸の築地海軍操練所教授に抜擢された。

その後 1862 年に幕府が派遣する海外留学生としてオランダへ出発、足掛け 5 年間の留学生活を送る。榎本は蒸気機関学・船具・砲術・理化学・生理学を専攻としたが、学習意欲は旺盛で、専攻外の法理学・国際公法学なども熱心に聴講していたという。特記すべきことの一つに、留学中の 1864 年 3 月、普墺戦争（デンマークとプロイセン・オーストリア連合軍との間でドイツ統一の主導権をめぐる行われた戦争）に観戦武官として従軍したエピソードがある。実際の戦争を間近で見る観戦武官に志願してハーグからベルギー、ドイツを経由してホルスタインからは「猛烈な勢いで進軍するプロシア・オーストリア連合軍と行動を共にした」<sup>3</sup>という。榎本はこの観戦により、西洋の近代兵器の威力や国際法に照らした戦争の方法を学んだ。さらに榎本はこの観戦で最新鋭の大砲（クルップ砲）の威力を目の当たりにし、帰り道にドイツのクルップ社を訪れ、その性能を確かめに行くという大胆な行動をとっている。榎本の進言により、建造中の幕府軍艦・開陽丸にこのクルップ砲を搭載することになる。またこの時榎本は独逸語を使ってクルップ社社長と話をしたという。若干「怪しげな独逸語」ではあったが「意を通ずるには足りた」<sup>4</sup>と、同行した赤松大三郎の手記に書かれている。また同年 10 月にはイギリスへ行き兵器工場や軍需施設、鋳山などを視察しているが、その時榎本は十分な英語力を発揮していたという。

また榎本は幕府がオランダに依頼した軍艦・開陽丸の造船監督に任命されていたため、ドルトレヒト

---

<sup>1</sup> 『現代視点・榎本武揚』榎本守恵執筆 旺文社

<sup>2</sup> カッテンディーケ著水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』東洋文庫

<sup>3</sup> 佐々木讓著『幕臣たちと技術立国 - 江川英龍・中島三郎之助・榎本武揚が追った夢』集英社新書

<sup>4</sup> 臼井隆一郎著『榎本武揚から世界が見える』PHP 新書

の造船所に足しげく通って建造過程をつぶさに学んだ。その知識を生かし、6月に池田長発の横浜鎖港談判使節がフランスに滞在した時には、パリへ赴きフランス海軍と軍艦購入の交渉も行った。このように榎本はオランダ留学の間にヨーロッパ中を駆け巡り、持ち前の語学力を生かして兵器や機械製造に関する知識を収集し、同時に西欧の近代文明を体感し身に付けて行った。そして世界最高水準のクルップ砲18門を搭載して完成した開陽丸に乗り込み、1867年3月、日本へ帰国したのであった。

### 3. 榎本が出した朝廷への嘆願書

#### <蝦夷地開拓の嘆願書>

榎本は帰国してすぐに海軍奉行・開陽丸船将（艦長）に任命された。海軍での地位を得た榎本は、早速海兵の服装を改めることにし、「開陽丸の士官から水夫・火夫にいたるまで洋服・ズボンに替えさせた」。<sup>5</sup>良いと思うことはすぐに実行する、榎本の合理的な考え方が伺える。

その年10月14日、徳川慶喜により大政奉還がおこなわれた。そして三か月後の1868年1月、薩長の挑発により鳥羽・伏見の戦いが勃発。幕府軍惨敗後の徳川慶喜の大阪城脱出に幕臣らは茫然とし、次々と城から逃げ出して行った。この時大阪城に残って周囲をまとめ、城に残された重要書類や刀剣、調用品などを軍艦に運ばせ江戸に届けるよう指揮したのが榎本だった。榎本はまた鳥羽伏見で負傷した兵士をすべて軍艦に乗せ移送した。この行動により榎本は幕臣たちから厚い信頼を受けるようになる。

その後、徹底抗戦を叫ぶ榎本ら幕臣たちを遠ざけ恭順を貫く慶喜と、勝海舟・山岡鉄舟の捨て身の交渉により4月11日には江戸城無血開城が実現した。慶喜は死一等を免じられ、徳川家の処分について朝廷の裁断を待つ身となった。軍艦の引き渡しを言い渡された榎本ら幕府艦隊は、神奈川沖に脱走し新政府軍への攻撃を計画したが、勝に説得され品川沖に戻った。勝は新政府軍へ引き渡す軍艦は老朽艦のみとなるよう巧に交渉し、開陽丸ほか主要な軍艦は幕府海軍のもとに残された。

この頃から榎本は蝦夷地行きを考えていたらしいことが資料に残されている。4月23日の勝海舟の日記には「榎本釜次郎来訪、軍艦箱館行きの事談有、不可然と答ふ」という一行が見られる。榎本は蝦夷行きを相談するため勝のもとを訪れていた。このままではたとえ徳川家の存続がなかったとしても、幕臣らの多くは禄を失い路頭に迷うことになる。榎本はこれを回避するためには、徳川の領地を蝦夷地に求めるほかはないと考えたが、その考えに勝は賛同しなかった。しかし榎本はその後もあきらめず、蝦夷行きを実現するために奔走した。

5月24日、新政府が下した徳川家への処分は駿河、遠江七十万石への減封というもので、四百万石と言われた徳川の領地がわずか七十万石に減らされるという厳しいものだった。これを受け大鳥圭介ら多くの旧幕府陸軍兵は、新政府への徹底抗戦を掲げて脱藩し、挙兵のために続々と集結していった。東北諸藩はすでに奥羽越列藩同盟を結成し、抗戦の決意を表明していた。その中であって榎本はあくまで幕臣たちの行き先を確保するため、蝦夷地開拓を目指して行動していた。

1968年6月、将軍慶喜に代わり徳川家を相続することとなった徳川亀之助の名で、江戸鎮台宛に「蝦夷地開拓の嘆願書」が提出された。これは内容から見て榎本の献策によるものと考えられている。主旨は「旧幕臣を蝦夷地に移住させて開拓をはかれば、彼らの生活も立ち、『皇国』への『忠勤』にもなろう」

---

<sup>5</sup> 『現代視点・榎本武揚』榎本守恵執筆 旺文社

<sup>6</sup>というものであった。榎本は徳川家からの嘆願という形で新政府から蝦夷地開拓の許可を得ようと考えた。しかしこの嘆願はまったく取り上げられることはなかった。

#### <徳川家大挙告文>

7月に入り榎本は、徳川家移封先の駿府へ家財の一斉と家臣らを軍艦に乗せて移送する役目を勝から命じられた。東北では奥羽越列藩同盟による抵抗が続いており、仙台からはしきりに応援の要請があったが、徳川家の移送を完遂するまで榎本は軍艦を動かすことはしなかった。しかし粛々と移送を続ける裏で、榎本は旧幕臣らと連携して武器や燃料を軍艦に積み込んでいた。また幕府の軍事顧問だったフランス士官らの要請を受け、乗船できるよう手筈を整えた。そして徳川家の移送が完了した8月19日、政府軍にすべての軍艦の引き渡しを迫られた榎本は、旧幕臣ら約2,400名を収容した八艘の艦船を率いて品川沖から脱走し、奥羽越列藩同盟に合流するため石巻を目指した。

出港に際して榎本は、官軍の鎮将府に宛てた「徳川家臣大挙告文」を、勝に託した。内容は軍艦を率いて北へ向かう理由を述べたもので、戦闘を宣言するものではなかった。榎本はこの文中で「維一王政の日に新たなるを望まんこと、皇国の幸福此上もなき事にして吾輩も亦冀望する所なり」と天皇の政を喜ばしいこととしながら、その実情については「一、二の強藩の私意に出、徳川慶喜に朝敵の汚名をきせ、旧幕臣を路頭に迷わせようとしている」<sup>7</sup>ものだと訴えている。そしてそのような薩長中心の政権には服従できない徳川家臣たちのため蝦夷地開拓を願い出たが、その声は届かず、やむなく北へ向かうことにしたと続けた。そして「これ敢えて乱を好むにあらず、和を妨ぐるにあらず」と書き、この行動が争いを起こすものではないことを強調した。

榎本はこれと同様の主旨を英文にして「徳川脱藩家臣」の名で英国公使パークス他、各国公使に提出した。旧幕府軍の正当性を認めてもらうことを意識した文面であり、各国からの理解と支持により蝦夷地を預かる道を開こうとしたものと考えられる。

榎本はまた、10月12日、石巻湾を出港して蝦夷地へ向かうにあたり、奥羽追討平潟口総督・四条隆謨宛に『蝦夷地の徳川家永久御預』を提出した。さらに蝦夷地上陸直後には、箱館知府事・清水谷公考に同様の嘆願書を届けようと使者を出した（この嘆願書は清水谷が旧幕府軍上陸直後、早々に五稜郭を捨てて青森へ逃走したため手渡すことができなかった）。

このように、榎本は移動する先々で朝廷宛の嘆願書を提出していった。榎本は渡す相手を変えながら、嘆願書を通じて新政府との交渉の糸口を探していたのではないだろうか。

## 4. ストーンウォールを巡る攻防

嘆願書の提出とともに榎本が注視していたのが、徳川幕府がアメリカで購入し、4月に横浜に入港した軍艦・ストーンウォール号の引き渡し先だった。ストーンウォール号は舷側が厚い鉄板で覆われた堅牢な装甲の軍艦で、射程距離最大3,600mのアームストロング砲<sup>8</sup>6門を搭載しており、この軍艦を手にした側が、闘いを有利に進められることは明白だった。

この軍艦の引き渡しの件は、戊辰戦争が勃発した1868年1月、各国公使の会合において重大な関心事

---

<sup>6</sup> 松田藤四郎著『榎本武揚と東京農大』東京農業大学出版会

<sup>7</sup> 松田藤四郎著『榎本武揚と東京農大』東京農業大学出版会

<sup>8</sup> 幕末軍事史研究会『武器と防具 幕末編』新紀元社 p93

となった。「内乱がまさに開始されたこのとき、軍艦が徳川政権や諸大名の手に入ることは、内乱を引きおぼし、日本における外国貿易や国内商業を荒廃させる恐れがあった」<sup>9</sup>ためである。旧幕府軍にこの軍艦が渡ることを恐れた新政府は、イギリスの助言を受けて、各国公使に宛てて「局外中立」の立場をとるように要請した。「局外中立」とは「戦争、内乱など戦闘状態が発生した場合に、外交関係を有する他の諸国が、いずれの紛争当事国、当事団体に対しても援助などの関与を行わない国際法上の措置」<sup>10</sup>のことである。この要請を受け、英、仏、米、普、伊、蘭の6か国の在日公使は協議を行い、25日、「局外中立」を決議した。これにより双方の「交戦団体」は諸外国からの武器の供与は禁じられ、榎本ら旧幕府軍がストーンウォール号を受け取ることもできなくなった。ストーンウォール号は4月1日の入港後もアメリカ公使の管理の下、横浜港に停泊したままとなったのである。

榎本は5月13日、ストーンウォール号の引き渡しを確認するためアメリカ公使館を訪れた。アメリカは局外中立を遵守し、どちらにも引き渡すことはないと回答したため、榎本は旧幕府軍の優位を保つことができると確信した。榎本の乗る開陽丸は当時諸藩が所有していた軍艦の中でも抜きでた性能を誇っており、開陽丸一艘だけで新政府海軍を制圧できると見られていた。この時点で海軍力においては旧幕府軍が圧倒的に有利だったのである。武力を背景に蝦夷地開拓の嘆願への許諾を得ようとした榎本には「局外中立」が保持されていること、すなわちストーンウォール号が新政府の手に渡らないことが交渉成立への必須条件だった。そのため榎本は蝦夷地・鷲の木に到着した10月20日、箱館在留各国領事に対し「徳川脱藩家臣」と署名されたフランス語の声明文を届けている。この声明文で榎本は箱館の外国人居留者に対する配慮を表明するとともに、「われわれは、その祖国の土の上にだけかく生きる正当な権利をもち、その権利を武器を手にして防衛しようとする交戦団体である」<sup>11</sup>と書き、交戦団体として待遇されることを要望した。榎本は箱館の各国領事に対して旧幕府軍の正当性を訴え、局外中立が破られないよう働きかけた。この榎本の声明を、アメリカ、プロシア、ロシアの領事は是認した。しかし新政府を後押しするイギリスと、それに同調するフランス・オランダの回答は「交戦団体権を認めない」という旧幕府軍には厳しいものだった。

## 5. 蝦夷地攻略と開陽丸の座礁

<箱館府（五稜郭）占領と松前藩制圧>

10月17日、蝦夷地・鷲の木に上陸した榎本艦隊の編成は、開陽、回天、蟠竜、神速の4艘の軍艦と輸送艦の長鯨、仙台藩から譲り受けた大江と鳳凰、気仙沼で奪った千秋の8艘だった。（のち、箱館港で秋田藩の軍艦高尾を接収）。司令部となる主な顔ぶれは歩兵奉行松平太郎、歩兵奉行並大鳥圭介、新撰組を率いる土方歳三、遊撃隊長人見勝太郎、軍艦頭取中島三郎之助、若年寄永井尚志などである。

艦隊は鷲の木に到着後、榎本の指揮により順次上陸し、箱館・五稜郭を目指して南下した。嘆願書を携えて先発した人見勝太郎隊と二陣として向かった大鳥圭介の大隊に箱館府軍が立ちはだかったが、七飯でこれを撃退。知府事・清水谷公考は兵約700を連れて五稜郭を捨て青森へ逃走したため、旧幕府軍は五稜郭へ無血入城した。

---

<sup>9</sup> 石井孝著『戊辰戦争論』吉川弘文館

<sup>10</sup> 石井孝著『明治維新の国際的環境』吉川弘文館

<sup>11</sup> 石井孝著『明治維新の国際的環境』吉川弘文館

続いて松前藩の攻略に取り掛かるが、榎本は二回に渡って松前藩主宛に「平和共存を願う」という主旨の書簡を届けた。榎本はできれば戦わずに協力関係を築きたかったとみられる。しかし松前藩は二度とも使者を斬って返事を出さなかったため、榎本はやむなく土方隊を出撃させた。

松前藩との戦闘では激しい抵抗を受けることとなる。実は松前藩と幕府の間には長い間の確執があった。1855年、日米和親条約締結による箱館の開港を受け、幕府は蝦夷地全域に亘っていた松前藩の領地を上知して、東北諸藩に分割し警備に当たらせた。経済基盤を奪われた松前藩は困窮し直訴を繰り返した。しかし将軍が家茂に代わると、江戸で兵学を学び西洋事情にも通じていた松前藩主・崇広が1864年、異例の抜擢で老中・海陸軍総奉行に任命された。だが松前藩領民が喜びに沸いたのも束の間、翌年、徳川慶喜と兵庫開港時期を巡って意見が対立し、崇広は罷免されて郷里で謹慎中、失意の内に38歳の若さで急逝した。この後松前藩では尊王派のクーデターを経て、佐幕派は一掃された。榎本が松前に平和の使者を送った時には、徳川幕府を憎悪する「正義隊」が藩を掌握していたのである。

松前藩に「平和共存」の道を遮断された旧幕府軍は、11月5日、陸路を土方軍が進撃、松前湾からは軍艦・回天が艦砲射撃を行い、松前城の藩兵を厚沢部の館城に敗走させた。土方軍はこれを追って戦闘を繰り返しながら、15日未明、激闘の末館城を陥落させた。

#### <開陽丸、江差沖で座礁>

榎本は自ら開陽丸に乗艦して江差へ向かい15日未明に到着したが、松前藩主らはすでに北へ敗走した後で江差は戦場とならなかった。榎本は開陽に乗ったまま陸兵が到着するのを待って江差沖に投錨していたが、夕刻になって状況が一変した。天候が急変して暴風が巻き起こり、開陽丸は暗礁に乗り上げてしまったのである。榎本は慌てて離礁を試みたが、船体は岩に挟まれて動かなかった。神速丸につないで離礁しようとするも、かえって神速までが故障してしまった。開陽丸機関長の記録には「後十余日を経、風波の為に全艦悉く破壊ス」<sup>12</sup>とあり、開陽丸はバラバラになって江差沖に沈んでしまったのである。榎本は「暗涙ヲ含んで少ク悄然」とし「天運よんどころなし」と呟いたという<sup>13</sup>

## 6. 局外中立の撤廃と宮古沖海戦

#### <最後の嘆願書を英仏公使に託す>

横浜にいる各国公使の間では、局外中立の撤廃について討論が重ねられていた。即時撤廃を主張するイギリスに対し、ストーンウォールを主管するアメリカ公使・ヴォルケンバーグは、領事のライスとともに旧幕府軍に対し同情的で、局外中立の撤廃に反対していた。開陽丸を失った榎本は、12月2日最後の望みをかけて天皇への嘆願書をしたため、英仏公使に取り次ぎを依頼した。14日、この嘆願書は岩倉具視に届けられたが、それに対し岩倉は「榎本らの嘆願は現行不一致でその行為は賊名を免れず、天皇へ奏聞するに値しない」<sup>14</sup>と却下を申し渡した。榎本の望みは断たれたのである。

イギリスは局外中立を撤廃すべく箱館の詳細な状況調査を各国公使に公表する。英国領事ユースデンの報告によると「箱館の貿易はまったく停止状態で、日本商人の大多数は箱館を立ち去った」「貧民階級は強制労働にかり出され」「富裕な階級はたえず御用金を出すことを要求される」「原住民は新来者を心

<sup>12</sup> 小杉雅之進著『麦叢録』（『小杉正之進が描いた箱館戦争』内資料）

<sup>13</sup> 中村彰彦著『幕末「遊撃隊」隊長人見勝太郎』洋泉社

<sup>14</sup> 田辺安一著『ブナの林が語り伝えること』北方新書

の底から憎んでいる」<sup>15</sup>といったもので、これにより各国公使はこれ以上戦争状態を長引かせるべきではないとの結論に至った。そして 28 日、正式に局外中立は撤廃され、同時にストーンウォールの新政府への引き渡しが決めたのである。新政府は3月の雪解けを待って、征討軍を差し向けることを決定した。

#### <接舷攻撃（アボルダージュ）決行>

新政府軍の来襲に備えて、旧幕府軍は台場の増強や弾薬の手配、フランス士官による砲術や銃撃訓練など防戦の準備を急いだ。しかし開陽丸を失った今、「甲鉄」と改名されたストーンウォール号の威力に対抗できるすべは無かった。

3月下旬、新政府軍の艦隊が宮古湾に入港するという情報を得た旧幕府軍は、回天艦長・甲賀源吾の決断により、甲鉄を「接舷攻撃（アボルダージュ）」という方法で奪取する作戦を実行した。アボルダージュとは敵艦の舷側に横付けにして、兵士が乗り移って船を乗っ取る攻撃方法で、旧幕府軍艦では蟠竜、高尾が甲鉄の左右を挟み込んで乗り移り、回天が他艦を攻撃して甲鉄に近づけないようにするという作戦だった。決死の部隊が宮古湾を目指して進撃したが、またも悪天候の不運に見舞われ三艦は互いを見失い、宮古湾に着いたのは艦長・甲賀と土方の乗る回天一艦だけだった。やむなく回天が甲鉄に船首から突っ込みアボルダージュを決行するが、作戦は不首尾に終わり、甲鉄に乗り移った数十名がガットリング砲の銃弾を受けて壮絶な戦死をとげた。船首で指揮を執っていた甲賀も狙い撃ちにされ命を落とし、回天は副艦長の荒井の操舵で、敵艦中を突破して箱館へ逃げ帰った。機関を故障して航行不能となっていた高尾は新政府軍に見つかり艦に火を放って投降した。アボルダージュ決行により旧幕府軍は貴重な軍艦と兵員をさらに失う結果となった。

## 7. 新政府軍上陸、五稜郭陥落

#### <二股口を土方が死守>

4月9日未明、新政府軍は主力部隊五千人を守備の手薄な乙部に上陸させた。そこから松前、木古内へ向かう軍と、二股口に向かう軍に分かれて進撃した。対する旧幕府軍は大鳥圭介を木古内口に、土方歳三を二股口に配備、松前城は人見勝太郎が守っていた。土方軍三百は山道を見下ろす山腹に十六か所の土塁を築いて射撃の猛攻を加え、12日、十六時間に及ぶ激闘の末、政府軍を押し返した。しかし松前、木古内は苦戦の末新政府軍に破られ、旧幕府軍は矢不來まで後退した。29日、矢不來は新政府軍の艦隊から激しい艦砲射撃を受け、砲台は破壊され死者が続出する事態となった。後退を続けた旧幕府軍は全軍が箱館へ退去、二股口を守っていた土方軍も退路を断たれる可能性があるため、榎本から五稜郭への撤退命令が出された。

#### <箱館総攻撃、榎本の降伏>

一方海上では5月7日、甲鉄以下新政府艦隊が箱館湾に侵入し海戦となった。蟠竜は機関が故障していたため停泊したまま応戦し、唯一機動力を発揮した回天も被弾して航行不能となったが、弁天台場近くの浅瀬に乗り上げ浮き砲台として砲撃を続け敵艦を港外に退かせた。榎本は大鳥とともに彰義隊士らを率いて陸戦を戦った。11日、機関を修理し動けるようになった蟠竜が敵艦・朝陽の火薬庫に一弾を命中

---

<sup>15</sup> 石井孝著『戊辰戦争論』吉川弘文館

させてこれを撃沈した。旧幕府軍からは歓声があがり、これを見た土方は「此機失フベカラズ<sup>16</sup>」と叫んで、孤立する弁天台場に救援に向かったが、一本木関門で新政府軍と遭遇し集中銃火を浴び戦死をとげた。12日には甲鉄から五稜郭に向かって激しい艦砲射撃が行われ、多くの死傷者がでた。13日、抵抗を続ける弁天台場と五稜郭へ新政府軍から降伏勧告が届けられた。榎本はこの勧告を受け入れず、返書とともに新政府軍へ「海律全書」を贈った。この書物は榎本が「オランダ留学中苦学した皇国無二の書」で、「兵火にかけ烏有とするのは惜しいのでドクトルから海軍参謀に贈ってほしい<sup>17</sup>」という手紙とともに、仲裁者の軍医・高松凌雲に託された。また榎本は五稜郭に拘留していた新政府軍捕虜を解放し新政府軍のもとへ送り届けた。自軍の病兵には金子を渡して湯川方面へ送り出し、脱走する兵はそのまま見逃した。

15日、永井尚志と新撰組隊士が守る弁天台場は単独で降伏し投降、そして最終決戦前日の16日未明、千代ガ岡台場を守っていた中島三郎之介の軍は、全員で台場から打って出て壮絶な死を遂げた。その日五稜郭には新政府軍参謀・黒田清隆から「海律全書」の返礼にと酒樽五樽が届けられた。五稜郭内では兵士らとその酒を酌み交わし、思い思いに最後のひと時を過ごしていた。榎本はこの時、彰義隊長・大塚霍之丞を総裁室に呼び、介錯を命じ自刃を図った。しかし大塚は榎本が短刀を腹に突き刺す瞬間、咄嗟に素手でこれを掴み、指三本を失いながら榎本に自刃を思い留ませた。この上は自ら降伏を宣言するほかはないと榎本は將兵を一同に集め、決意を表明した。その時の様子は「我一身ヲ潔クセントテ衆ニ害ヲ残スハ丈夫ノ為ス所ニアラズ。衆ニ代リ敵軍ニ赴キシニ千鈔ヲを動かセシ罪ヲ以テ皇裁ヲ仰ギ甘ンジテ天戮ニ就カント決定セリ」「衆涕泣議論数刻遂ニ之ニ従フ」<sup>18</sup>とあり、兵士らも涙ながらに降伏を受け入れた。これをもって榎本が蝦夷地開拓の望みをかけて挑んだ箱館戦争は終結したのである。

5月17日、榎本は亀田八幡宮で降伏の誓書を奉納し、首脳六名とともに青森に護送され、その後東京の辰ノ口牢獄に収監された。生き残った兵士一千八名は諸藩預かりとなり、その後解放された。

## 8. おわりに

榎本にとっての箱館戦争とは、蝦夷地を旧徳川家臣団の領地とするという希望をかなえるための闘いであった。そしておそらく榎本は軍艦の威力を背景に、戦争をせずに蝦夷地を移譲されることを企図していた。しかし開陽丸が沈み、甲鉄が敵の手に渡ったことで武力の均衡は破れて闘いに突入していった。

榎本の考えは無謀であり、初めから蝦夷行きに反対していた勝の考えが正しかったという見方もある。しかし戊辰戦争の最中、榎本は一人徳川家臣団の救済策を打ち出し、戦闘を交えずにそれを実現させることに奔走した。目的は果たせず、多くの戦死者を出し箱館の街を焼野原にして戦争は終結することとなったが、榎本が自らのもつ知識と経験、そしてそれまでの人生のすべてをかけて果敢に立ち向かっていった姿には、後世の人にも訴えるものがあると思うのである。

---

<sup>16</sup> 合田一道編著『小杉正之進が描いた箱館戦争』北海道出版企画センター

<sup>17</sup> 若林滋著『箱館戦争再考』中西出版

<sup>18</sup> 小杉雅之進著『麦叢録』（『小杉正之進が描いた箱館戦争』内資料）